

「あの日の恐怖を忘れずに」

広島県 東広島市立黒瀬中学校 3年 三木 穂摘

教室の窓からは、大きな山が見える。その山の表面には所々、土砂崩れによってできた、山肌がむき出しで木のない部分がある。それを見るたびに、私は2年前の西日本豪雨災害を思い出す。

2年前の夏、私が経験した中で1番と言える、強い雨が何日間か続いた。私の家は高い所に建っていて、周辺には土砂崩れが起きるような場所、川などがなかったことから避難せず家のテレビで状況を確認していた。土砂によって家屋が崩れる映像を何度も見たが、自分の身に起きた出来事ではなかったからか、怖いと感じるものの、どこかで他人事のように思っていた。連日続いた雨が止み、私は母とスーパーへ行った。その車内で見た、山の光景に私は驚いた。いつもは緑でおおわれている山の斜面に、ごっぽりと穴が開いていたからである。

そんな時、私の親せきが土砂災害の被害にあったという知らせを受けた。すぐに駆けつけようと思ったが、流れこんできた土砂が道をふさいでいたため、近づくことさえできなかった。通行止めが解除され、被害にあった親せき宅を訪ねた。道中私は、山に穴が開いているように見えていたものが、土砂によって木々がなぎ倒されてできたものだと知った。遠くから見るよりもずっと大きく、見たこともない岩が道に押し寄せていた。雨の威力をひしひしと感じながら家に到着した。おじさんとおばさんは温かく迎えてくれたが、私は家の様子を見て言葉が出なかった。家の中にまで押し寄せた土砂によって、たたみはボロボロ、壁も泥まみれになっていた。学校にも被害にあった人はいたため、土砂災害を身近に感じ、あらためて恐怖を感じた。

私は、この経験を通して、土砂災害による被害を防止するために自分ができることを3つ考えた。

1つ目は、地域内での人とのつながりを大切にすることだ。地域の祭りなど交流の場で顔見知りの人を増やすと、避難する際に声をかけ合うことができる。避難することが困難な場合も協力することができ、個々の避難状況を確認することもできる。2年前被害にあった親せきのおばさんも、近所の人に声をかけ合って避難したと言っていた。1人では不安だけど、そばにいてくれる人がいれば誰でも心強いと思うはずだ。また、大雨が降ったときは『川の氾濫に注意してください』といった放送が町内に流れるのだが、私の家は全くそれが聞こえない。こういった時に、地域の人とそれぞれが持っている情報を共有することで、危険から身を守ることができると思う。このように地域の人とのつながりを大切にすれば自分だけでなく、お互いの身を守ることもつながる。

2つ目は、ハザードマップを日頃から確認しておくことだ。ハザードマップという名前は知っていても見たことがないという人が多いと思う。私自身、学校の授業で確認したぐらいでほとんど見たことがない。でも、1度でもハザードマップを確認することは避難の際にも大きな情報になると思う。なぜなら、自分は危険だとは感じていなかった場所が、危険と表示されていたりと新しい発見がいくつもある。そして、危険な場所を認識した上でその時の災害の状況に応じて臨機応変に対応ができるかもしれない。このように、ハザードマップを確認することは、身の安全を確保する上でも今すぐにやるべきだと思う。そしてこれをきっかけに、家庭内での防災意識が高まってほしいと思う。

最後は、防災グッズを用意しておくことだ。防災グッズは年々進化しているようで、ニュースで取り上げられているのを目にする。以前、学校の授業で非常食を試食した。私は非常食に対しておいしいという印象はもっていなかったが、おいしくて驚いた。栄養バランスも考えられているので健康に気を使っている人にもいいなと思った。このような、安心・安全の防災グッズを用意しておくことで、いざ災害がおきた時、心に余裕を持って行動することができると思う。また、避難する必要はなくても災害の影響で断水がおこった時にも対応できるよう、水は常備する必要があると思う。

現在、『100年に1度』などと言われる雨が2年に1回は降るなど、いつ土砂災害にあってもおかしくない状況だ。私の家は高い所にあるが、だからといって災害に対して安心はできない。自分

令和2年度 「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞(事務次官賞)

は大丈夫でも大事な人を失うかもしれない。そうならないためにも、日頃から土砂災害防止につとめる必要があると思う。